

勅撰和歌・漢詩集にみる 場所イメージの形成過程 —平安京南部の水辺の別業を対象として—

田中 棕¹・山口 敬太²・川崎 雅史³

¹学生会員 京都大学大学院工学研究科 博士後期課程
(〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail:tanaka.ryo.87a@st.kyoto-u.ac.jp)

²正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 准教授
(〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail:yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp)

³正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 教授
(〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail:kawasaki.masashi.7s@kyoto-u.ac.jp)

日本では古来、詩歌に詠むことを通して、場所と文学的なイメージとの結びつきを形成してきたが、その結びつきは様々な時代背景のもとで変化してきた。本研究では、文芸活動が盛んに行われた平安京南部の水辺の別業を取り上げ、勅撰集から抽出した漢詩・和歌の分析を通して、詠まれたイメージの形成・変化の過程とその時代背景を明らかにした。その結果、別業や上皇らの存在と結びついたイメージは別業の造営・衰退に伴って形成・変化・途絶がみられたこと、歌人らがその場所の自然に触れる機会が創出されたことで自然の捉え方の変化、新たな歌枕の形成・定着、既存のイメージの具体化などがみられたことを示した。

キーワード: 京都, イメージ, 和歌, 漢詩, 別業

1. はじめに

(1) 背景と目的

近年人口減少が進み、地域の特色を生かしたまちづくりが求められるなか、歴史的に言語芸術に描かれてきた場所のイメージを把握することは、重要なアプローチの1つである。

日本では、和歌や漢詩が古代から時代を超えて詠まれた主要な表現媒体であり、個人による表現が広く共有され、集団的なイメージを形成し得た。とりわけ、特定の場所が和歌や漢詩に詠まれる際、その場所に関わる古歌を規範とし、その表現やイメージが引き継がれることで、場所と特定のイメージとの時代を超えた結びつきが形成された。一方、一度形成されたイメージも、その全てがそのまま引き継がれるわけではなく、時代背景の様々な変化や歌人らの解釈によって変化し、また、新たなイメージが形成されてきた。

実際に、既往研究では、中世以前から継承された場所のイメージが近世における観賞方法の多様さに影響を与えたとされる¹⁾。またその一方で、歌人らは古歌による場所のイメージを引継ぎつつも創造的な解釈を加え場所のイメージが動的に変化・形成されたこと^{2) 3)}、近世まで

継承された場所のイメージが近世後期から近代にかけての近代化に伴って大きく変化したことが示されている⁴⁾。しかし、中世以前の場所のイメージがどのような背景のもとで形成され、それが持続もしくは変化したかを実証的に明らかにする研究は未だ限られている⁶⁾。

本研究では、平安京南部に営まれた3つの別業(河陽宮、鳥羽殿、水無瀬殿)を取り上げる(図-1)。平安京南部は、宇治川、桂川、木津川、およびそれらが合流した淀川が流れ、広大な巨椋池が広がる、低湿地であった。古代から河川が舟運路として利用され、津が設けられるなど、水辺の活用が盛んに行われていた。なかでも別業は皇族貴族らの行幸先となり、種々の宴や遊び、歌合などが行われ、和歌や漢詩が詠まれる拠点であった。本研究で対象とする別業は、それぞれに利用された時代や期間が異なるため、各別業に固有のイメージ形成・変化の過程や水辺との関わり方があったものと考えられる。これまでも、個々の別業のイメージに関する研究はあるが^{7) 8) 9)}、水辺の別業としての体系的な整理はされていない。

そこで本研究は、和歌・漢詩の通時的な分析を通して、詩歌に詠まれた場所のイメージが、どのような時代背景のもとで、どのように形成・変化してきたかを明らかにすることを目的とする。

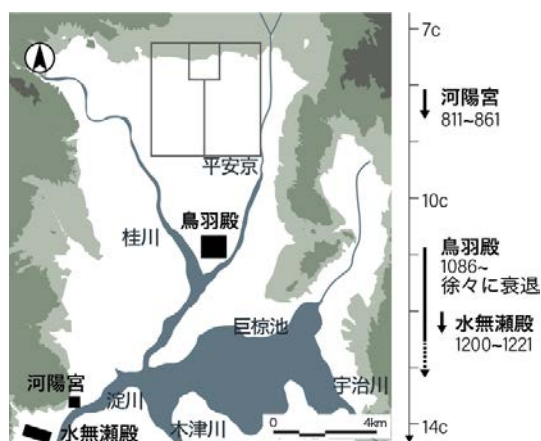


図-1 対象とする別業の位置と年代

表-1 対象とする勅撰集の一覧

対象とする勅撰集	成立年代	下命者	選者	
群 書 類 從	凌雲集	814年成立	嵯峨天皇	小野岑守・菅原清公ら
	文華秀麗集	818年成立	嵯峨天皇	藤原冬嗣・仲雄王・菅原清公・滋野貞主ら
	経国集	827年成立	淳和天皇	良岑安世・滋野貞主・菅原清公ら
新 編 国 歌 大 観	古今和歌集	905年（下命か成立か不明）	醍醐天皇	紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑
	後撰和歌集	951年下命（成立は不明）	村上天皇	大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城
	拾遺和歌集	1005-6頃成立	花山院	花山院
	後拾遺和歌集	1086年成立	白河天皇	藤原通俊
	金葉和歌集	1126-7年成立	白河法皇	源俊頼
	詞花和歌集	1151年成立	崇徳院	藤原顕輔
	千載和歌集	1188年成立	後白河院	藤原俊成
	新古今和歌集	1205年成立	後鳥羽院	源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅経・寂蓮
	新勅撰和歌集	1232年成立	後堀河天皇	藤原定家
	続後撰和歌集	1251年成立	後嵯峨院	藤原為家
	続古今和歌集	1265年成立	後嵯峨院	藤原為家・藤原基家・藤原家良・藤原行家・葉室光俊
	続拾遺和歌集	1278年成立	亀山院	二条為氏
	新後撰和歌集	1303年成立	後宇多院	二条為世
	玉葉和歌集	1313年成立	伏見院	京極為兼
	続千載和歌集	1320年成立	後宇多院	二条為世
	続後拾遺和歌集	1326年成立	後醍醐天皇	二条為藤・二条為定
風雅和歌集	1349年成立	花園法皇	光厳院	
新千載和歌集	1359年成立	後光厳院	二条為定	
新拾遺和歌集	1364年成立	後光厳院	二条為明・頼阿	
新後拾遺和歌集	1384年成立	後円融天皇	二条為遠・二条為重	
新続古今和歌集	1439年成立	後花園天皇	飛鳥井雅世	

表-2 検索に用いた地名・名称と抽出歌数

別業	検索語	抽出歌数
河陽宮	河陽，江頭亭子，江亭	26
鳥羽殿	鳥羽（とば），鳥羽殿，鳥羽田（とばた）	57
水無瀬殿	水無瀬（みなせ）	30

2. 分析の方法

(1) 分析に用いた資料

分析の対象とする資料は、代表的な詩歌を通時代的に取り上げるため、勅撰和歌集・漢詩集に収録された和歌・漢詩とする(表-1)。Japan knowledgeの検索機能を用いて、『新編国歌大観¹⁰⁾』および『群書類従¹¹⁾』に収録された勅撰和歌・漢詩集から、対象とする別業に関わる和歌・漢詩を抽出した。

a) 和歌の抽出

『新編国歌大観』で、勅撰和歌集に収録された和歌のうち、歌や詞書、左注に、対象とする別業に関わる地名や歌枕、別業名を含むものを検索した。表-2に、検索に用いた地名・名称と、抽出できた詩歌数を示す。その上で該当した和歌を全て確認し、以下の2点を基準として、適当な和歌のみを抽出した。

・意図した語義と異なる意味で用いられた語が検索に該当したものは除いた。たとえば、地名「鳥羽」の検索に、人名である「鳥羽院」が該当し、そのほか詞書や歌に地名としての「鳥羽」が認められない場合は、対象から除いた。

・別業で行われた歌合や前栽合では、必ずしもその別業に関わる歌が詠まれるとは限らない。そこで、対象とする場所に関わる地名・歌枕が詠まれず、詞書に歌合・前栽合での歌であることが明記されたもの、あるいは別の地名・歌枕が詠まれている歌は対象から除いた。

b) 漢詩の抽出

『群書類従』に収録された三大勅撰漢詩集『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』から、河陽に関わる漢詩を抽出した。このとき、表現上必ずしも「河陽」という呼称が詩中に用いられないことから、以下の手順で行った。まず、『凌雲集』からは、井実¹²⁾が河陽に関連する作品として指摘する八首を抽出した。次に、これらの詩で河陽宮の呼称として用いられた「河陽」「江頭亭子」「江亭」を検索語として、『文華秀麗集』『経国集』から河陽に関する漢詩を抽出した。

(2) 分析の手順

まず、得られた和歌・漢詩を、歌中の表現や詞書、歌集における部立を参考に、KJ法におけるグルーピング手法を用いて整理し、詠まれたイメージを整理した。これにより、各場所において詩歌に詠まれたイメージの把握を行った。ただし漢詩は文字数も多く、複数のイメージを読み取り得ることから、該当する全てのイメージを抽出した。

次に、各詩歌が詠まれた年代を世紀単位で特定し、それぞれのイメージを詠んだ和歌・漢詩数の時代変化を把

握した。このとき、詞書に詠んだ年が記載されているものはそれを用い、記載のないものは作者の生きた年数が最も長い世紀とした。ただし、漢詩群は成立年代が近く、世紀単位での比較ができないため、漢詩集ごとに比較する方法を取った。

以上の整理をもとに、各場所において、詩歌数の変化からどのようなイメージがどのように形成・変化したかを示し、それらが時代背景の変化とどのように関連しているかを考察した。

3. イメージ形成・変化の過程についての考察

(1) 河陽宮

河陽宮は、811年に山崎駅を行宮として利用したことを契機に整備され、861年に名称のみ残して国府に転換されるまでの間、別業として利用された。水無瀬（水生野）や交野で遊猟を行う際に利用されることが多く、また、天皇が詩を詠みそれに応えて家臣が詠み返す君臣唱和の形で漢詩が詠まれた。川の北側を意味する「河陽」は、中国文学においては花と強く結びついた地名であり、そこに山崎の地を見立てたことで、河陽特有の文学イメージが形作られたとされる¹³⁾。以下では、『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の比較から、イメージの形成・変化過程の考察を行う¹⁴⁾。表-3には、抽出したイメージと詠まれた漢詩数の変化を示し、同じイメージを詠む漢詩に共通する表現上の特徴がある場合はこれも記載した。

a) 河陽とその自然に対するイメージの変化

淀川と周囲の山々からなる自然を詠み込んだ詩がいずれの漢詩集にも最も多く認められたが、その表現には漢詩集ごとに変化がみられた。『凌雲集』では「水流長く製す天然の帯、山勢多く奇し造化の形⁵⁾」（淳和天皇）、「千峰の積翠山を籠めて暗し、万里の長江海に入りて寛けし¹⁶⁾」（嵯峨天皇）のように、眼前に広がる淀川と幾

重にも重なる山々の迫力を強調した詩が多く認められた。都とは違い、狭窄した地形によって山や川が近くに迫る河陽の大自然に対する畏怖が読み取れる。また、そうした大自然とともに、そのなかで営まれる民衆の生活の様子や、野での遊猟の様子、河陽宮で過ごす夜の旅情、河陽宮からの暖かな春の眺めなどが詩に詠まれた。たとえば、「山猿の客を助けて叫ぶことを聴くと雖ども、誰か能く帝京の春を憶はざらめや¹⁷⁾」（嵯峨天皇）と、大自然の中で過ごす夜の旅情を詠んでいる。中国漢詩において猿の鳴き声は、悲哀や旅情のイメージを象徴する景物である¹⁸⁾。このような表現から、山城国の国界に位置する河陽を、都から遠く離れた辺境として捉え、自然への畏怖やそこで過ごす寂しさが詠まれていたと言える。

『文華秀麗集』でも同様に、「流静にして遊艇を看、溪幽かにして落泉を聴く¹⁹⁾」（巨勢識人）、「一道の長江千里に通ひ、漫々なる流水行船を漂はす（漂わす）²⁰⁾」（嵯峨天皇）と、山川を主とする自然が詠まれた。これらは、川などの規模が大きいことを詠む点では『凌雲集』と共通するが、畏怖を含むような表現は少なく、静かで悠然とした山川の様子を詠んでいる。この理由として、『凌雲集』では未知の存在であった自然が、河陽への行幸・遊猟を重ねるにつれ、身近な存在へと変化していったことが考えられる。これに伴って、『文華秀麗集』では「江頭の亭子人事に睨き（そむき）²¹⁾」（嵯峨天皇）、「山僧巖水に嗽ぎ²²⁾」（滋野貞主）などのように俗世間を離れた隠遁を思わせる表現も認められるようになった。すなわち、都から離れた辺境としての位置づけは『凌雲集』と変わらない一方で、未知の自然の中で過ごす旅情を伴う場所から、自然の中で俗世間を離れて暮らす隠遁の場所にもなりつつあったと言える。『経国集』収録の「春江賦」では、「賦」という散文に近い長大な形式がとられており、それ以前の詩を網羅するような内容であるが、ここでも「飢猿曉に羈旅の情を動かす。帰旅春に乗りて心転幽けし、江南江北遨遊を事とす。惣べて春深きがために感歎多く、年々江を望みて憂を銷すこと得²³⁾」（嵯峨天皇）と、旅情と脱俗的な隠遁と両方のイメージが詠まれている。

同様の変化が、河陽と天皇との結びつきにも読み取れた。『凌雲集』では遊猟の様子とともにその意義を中国の周文王の故事に擬えて²⁴⁾ 詠むことで天皇を讃美した。一方『文華秀麗集』では、遊猟は詠まれず「幸頼に天覧に陪り、還星渚の査に同じ²⁵⁾」（仲雄王）のように、河陽宮に天皇がいること自体を光栄とする賛歌が詠まれており、河陽宮と天皇との存在が強く結びついていることがわかる。

以上のように、河陽宮では、山城国の辺境と言う土地柄のもとで、大自然や別業と歌人らとの関わりが強い

表-3 河陽宮で詠まれたイメージと漢詩数の変化

イメージ		凌雲集(計8)	文華秀麗集(計16)	経国集(1)
大自然のイメージ	漢詩数	6	7	1
	表現の特徴	迫力を強調	悠然とした自然→	
旅情	漢詩数	1	1	1
	表現の特徴	猿声を景物とした旅情→		
厭世・脱俗のイメージ	漢詩数	-	6	1
	表現の特徴			
民衆の生活のイメージ	漢詩数	2	2	1
	表現の特徴			
遊猟のイメージ	漢詩数	3	-	-
	表現の特徴			
天皇への畏敬	漢詩数	2	3	-
	表現の特徴	故事を引用		
春興のイメージ	漢詩数	2	4	1
	表現の特徴		景物が具体化・拡大→	

るに伴って、詠まれるイメージも変化していた。また、詠まれたイメージや表現からは、河陽の自然と河陽宮とを切り離さず一体として捉え、自然の中で過ごすという意識が読み取れる。詩中においても、わずかに「園林」などの語に庭園の存在が示唆されるが、庭園と周囲の山川や野とを明確に区別した表現は認められない。

b) 『文華秀麗集』における景物の拡大

『凌雲集』では、山川が代表的な景物として共通して詠まれたほか、船や漁夫などの水辺の景物が認められるが、詠まれる景物の種類は少ない。また、「春日」を題に含む詩が多く、霞や青草が春興を起こす景物として取り上げられているものの、強く春を想起させる表現は、花を取り上げて「朝花の巧笑豈に看るに堪へむや²⁶⁾」(嵯峨天皇)とする表現が認められる程度である。これに対して『文華秀麗集』では、より豊富な景物が読み取れる。特に、河陽十詠と題される詩群では、それぞれ、花や船、橋、月、柳、鷗、鐘の音など、水辺の景物を中心とした特定の景物を取り上げており、河陽を代表する景物として詠んでいると考えられる。水辺の景物のほかには、地名の由来となった中国河陽の故事をひきつつ、「河陽の風土春色饒ひ、一県千家花ならぬは無し。江中に吹き入りて錦を濯ふが如く、機上に乱れ飛びて文沙を奪ふ²⁷⁾」(藤原冬嗣)と、一面に咲き乱れた花が舞い散り、川面を染める情景を詠み、明確な春のイメージを起こす景物として花を取り上げている。

(2) 鳥羽殿

鳥羽殿は1086年に白河上皇によって造営が始まり、その後200年以上も院御所として利用された。その間多くの上皇らが行幸を行っており、上皇や院政と関わりの深い場所であったと言える。また、鳥羽殿は桂川と鴨川の合流部に近い水辺の景勝地に造営され、扶桑略記に「池広南北八町、東西六町…(中略)…池水湛々、風流之美不可勝計²⁸⁾」とされるように、広大な池を有することが鳥羽殿の特徴であった。以下では、時代ごとに、イメー

ジの変化の特徴と、時代背景との関わりを考察する。表-4には、抽出したイメージと詠まれた和歌数の時代変化を示し、同じイメージを詠む和歌に共通する表現上の特徴がある場合はこれも記載した。ただし、2つ以上の和歌に詠まれたイメージのみを取り上げ、詠まれた年代が特定できない和歌は合計数にのみ含めた。

a) 11-12世紀におけるイメージの形成

11世紀には、上皇らの栄華に対する賛歌や鳥羽殿の庭の景物を詠んだ歌が認められるようになり、いずれも13世紀まで詠まれ続けている。石井は、鳥羽殿は上皇らの権力の盛衰を象徴する空間であったことを指摘し、その重要な景物として池を挙げている²⁹⁾。実際に、鳥羽殿の広大な池を主な景物として詠んだ賛歌は11～13世紀を通して最も多く認められた。たとえば、11世紀には白河院が「いけみづにこよひの月をうつしもてこころのままにわが物と見る³⁰⁾」(金葉和歌集)と池に映る月を景物に自らの権威を誇り、12世紀には堀川院が「いけみづのそこさへにほふはなざくら見るともあかじちよのはるまで」(金葉和歌集)と池に浮かぶ桜の花の美しさに千代の栄華を詠んだ。さらに、13世紀には後鳥羽院が「いにしへも心のままに見し月のあとをたづぬる秋のいけ水」(続後撰和歌集)と歴代の栄華に思いを馳せたように、広大な池は時代を超えて、各時代の上皇らの栄華の象徴であり続け、また、そうした栄華の歴史を物語る景物であった。また、栄華を称えるような表現を含まない、庭の景色を叙景的に詠んだ和歌も多く認められた。池や桜などを景物として取り上げて庭の美しさを詠んでおり、庭の鑑賞も楽しんでいたことがわかる。

12世紀には、栄華だけではなく、皇族の死別や老いに際して詠んだ和歌も認められるようになった。こうした死や老いのイメージが鳥羽殿と結び付けて詠まれたのは、上述したような、上皇や皇族らと鳥羽殿との深いつながりがあったからこそだと考えられる。特に、白河天皇や鳥羽天皇らは鳥羽殿の寺院に埋葬されており、鳥羽殿は、世代交代や歴史が蓄積される中で、盛衰のいずれのイメ

表-4 鳥羽殿で詠まれたイメージと和歌数の時代変化

イメージと和歌の部立		10c	11c	12c	13c	14c
庭の景色 春(6),夏(1),秋(1)	和歌数(計8)	-	3	3	2	-
	表現の特徴		桜、池を景物とした歌→			
上皇らの栄華 賀(20),秋(4)	和歌数(計24)	-	8	5	11	-
	表現の特徴		池、月、桜を景物とした賛歌→			
上皇らの追想 雑(3),哀愁(1)	和歌数(計4)	-	-	3	1	-
	表現の特徴					
野山の寂寥 秋(3),恋(1)	和歌数(計4)	-	-	-	4	-
	表現の特徴					
田園の景色 秋(11),夏(3),雑(1)	和歌数(計15)	1	2	3	4	4
	表現の特徴			歌枕「鳥羽田」の定着→		

歴史上の主な出来事

● 1086 鳥羽殿造営着手 ● 1221 後鳥羽上皇、鳥羽殿から
白河天皇が鳥羽に埋葬 1129 ● 1155 近衛天皇が埋葬 挙兵し承久の乱
● 1156 鳥羽天皇が埋葬

ージとも結びついていったことがわかる。

これらは鳥羽殿の造営を契機に形成されたイメージであり、鳥羽殿や上皇らの存在と強く結びついた景物およびイメージである。その一方で、これらの和歌は、ほとんどが歌中に地名・歌枕を詠んでおらず、上皇らの盛衰に関わるイメージは地名・歌枕とは結びついていなかった。

歌枕として頻繁に詠まれた地名は「鳥羽田」のみであった。10世紀の歌人である曾爾好忠が「鳥羽田」を詠んだことをはじめとして、特に12世紀以降に鳥羽の歌枕として盛んに詠まれ始めた³¹⁾。こうした12世紀以降の「鳥羽田」の定着は、鳥羽殿が造営されたことで、歌人らが鳥羽の田園に触れ歌を詠む機会が創出されたためであると考えられる。また、「鳥羽田」は地名である「鳥羽」と本来景物である「田」の複合語であるため、歌枕であると同時に、鳥羽周辺に広がる田園の景物としても詠まれていた。田園を詠んだ15首のうち12首が「おほえ山かたぶく月の影さえてとばたの面におつるかりがね」（慈円、新古今和歌集）のように鳥羽田を詠んだほか、稲葉や穂浪を景物とした歌が詠まれた。なかでも秋の歌が多く認められ、早苗を景物として水を張った田を詠んだ歌は3首ほどであった。そのため、水辺の場所ではあるが、河川や水との和歌上のつながりは認められない。

b) 13-14世紀におけるイメージの変化と途絶

鳥羽殿は13世紀以降、行幸が少なくなっていたことが指摘されており³²⁾、後嵯峨院期には「鳥羽殿も、近頃はいたう荒れて、池も水草がちに埋もれたりつるを、いみじう修理し磨かせ給ひて³³⁾」とされるように、大きな修繕が必要なほど荒廃していた。

13世紀には、田園の景物ではなく、「秋の野の尾花」「さをしかの妻どふ山」といった秋の野山の寂しさや人恋しさを想起させる歌が、4首詠まれている。「鳥羽田」を詠む歌は13世紀以降も認められることから、田園が野へと変化したのではなく、荒廃した鳥羽殿の姿に秋の野の寂寥を想起して和歌に詠んでいたと考えられる。

14世紀には、鳥羽を詠む和歌数が大きく減少し、ほとんどのイメージが途絶していた。上皇らの盛衰のいずれ

のイメージも庭の景色も全く詠まれなくなっており、鳥羽殿が使われなくなるに伴って上皇らとのつながりも薄れていったものと考えられる。また、野山の寂寥を詠んだ歌も同時に途絶していることから、上述したように野山の寂寥は荒廃した鳥羽殿に結びついたイメージであり、鳥羽殿が詠歌の対象とならなくなるとともに、イメージも途絶したと考えられる。その一方で、「鳥羽田」が歌枕として定着したことによって、鳥羽殿に関わるイメージが途絶して以降も、田園の景色は詠み継がれていた。表現の特徴にも大きな変化は認められず、和歌における「鳥羽田」のイメージは、鳥羽殿とは独立して定着していたものと考えられる。

(3) 水無瀬殿

水無瀬殿は、源通親の別荘を、1200年に後鳥羽上皇の別業としたことをはじめとする。その後幾度かの改修を経て「えも言はずおもしろき院造して、しばしば通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり世をひゞかして、遊をのみぞし給ふ³⁴⁾」たとされる。およそ20年間後鳥羽上皇が盛んに使用したが、承久の乱後配流され、その後別業としては使用されなくなった。以下では、時代ごとに、イメージの変化の特徴と、時代背景との関わりを考察する。表-5には、抽出したイメージと詠まれた和歌数の時代変化を示し、同じイメージを詠む和歌に共通する表現上の特徴がある場合はこれも記載した。ただし、2つ以上の和歌に詠まれたイメージのみを取り上げ、詠まれた年代が特定できない和歌は合計数にのみ含めた。

a) 9世紀におけるイメージの形成

「水無瀬川」を詠んだ歌は9世紀頃から認められるが、初期の歌では、伏流し地表に水が無い川を指す普通名詞あるいは枕詞として用いて、恋の思いを詠んだ歌がほとんどを占めていた。こうした歌には、言葉上での連想をもとにした技巧的な表現が定型的に用いられた。その例として、地表に水が表れない様子に忍ぶ恋を喩えるものや、水が無いことに対して「有りて」などの表現を対比させるもの、水の少なさに思いの浅さを喩えるもの、な

表-5 水無瀬殿で詠まれたイメージと和歌数の時代変化

イメージと和歌の部立		9c	10c	11c	12c	13c	14c
恋のイメージ 恋(10), 雑(2)	和歌数 (計 12)	3	1	1	2	2	2
	表現の特徴	普通名詞「水無瀬川」・定型的表现→			「水無瀬川」のイメージが具体化→		
川の景色 春(2), 秋(2), 夏(1), 冬(1), 雑(1)	和歌数 (計 7)	1	-	-	-	1	2
	表現の特徴	花, 月が景物			固有名詞「水無瀬川」の定着→		
山の景色 秋(3)	和歌数 (計 3)	-	-	-	-	3	-
	表現の特徴				「水無瀬山」定着		
水無瀬殿の追想 秋(3), 雑(1), 哀愁(1)	和歌数 (計 6)	-	-	-	-	5	1
	表現の特徴				固有名詞「水無瀬山」「水無瀬川」		

歴史上の主な出来事

水無瀬で頻繁に遊猟

● 811~ 近隣で河陽宮の利用開始

● 1200 水無瀬殿を別業とする

● 1221 承久の乱後
後鳥羽上皇は隠岐に配流

どが挙げられる。特に9, 10世紀の歌には、「みなせ河有りて行く水なくはこそつひにわが身をたえぬと思はめ」

(よみ人知らず, 古今和歌集) のように, 川や水以外に具体的な景物は詠まれず, 固有名詞「水無瀬川」や地名「水無瀬」をどのように捉えていたかは読み取れない。

一方で, 9世紀に地名としての「水無瀬」を詠んでいると考えられる歌も, 壬生忠岑の1首のみ認められる。壬生は「月入花瀬暗」の題で「ちりまがふ花は衣にかかれどもみなせをぞ思ふ月のいるまは」(新拾遺和歌集)と, 花や月を水無瀬の景物として詠んでいる。普通名詞としての水無瀬川を詠んだ恋歌とは一線を画しており, この歌のほかにも, 9世紀頃に水無瀬の花や月を景物とした歌は勅撰集には認められない。この背景について, 歌枕「水無瀬」のイメージに, 河陽で詠まれた漢詩群のイメージが影響を与えていた可能性があることが指摘されている³⁵⁾。実際に, 水無瀬と隣接する河陽で, 春興を起こす景物として川面に舞い散る花が詠まれていたことは, 本章第1節で示した。「河陽」は地名というよりも漢詩上のイメージと結びついた特有の呼称であるため, 和歌に詠まれる上では「水無瀬」のイメージとして詠まれたことが考えられる。

b) 12-13世紀におけるイメージの形成と変化

13世紀以降には, 地名としての「水無瀬」や固有名詞としての「水無瀬川」「水無瀬山」を詠む和歌が複数認められた。13世紀には水無瀬殿が造営されており, 水無瀬に行幸を行う機会が創出されたことで, 具体的な景物を取り上げたより叙景的な歌が詠まれるようになったと考えられる。たとえば, 後鳥羽上皇は, 「見わたせば山もとかすむ水無瀬河夕は秋となに思ひけむ」(新古今和歌集)と詠み, 枕草子で「秋は夕暮れ」とされるような既存のイメージに対して, 川と山とに囲まれた水無瀬の春の夕の景色の美しさを詠んでいる。ただし, 固有名詞としての山川が詠まれるようになって以降も, 「有りて行く(水)」などの「水無瀬川」に関わる定型化した表現を部分的に踏襲した歌も多く認められた。

山川のイメージが具体化する一方で, 勅撰集には, 水無瀬殿の庭の景色や, 水無瀬殿と周囲の山川との関わりが読み取れる和歌は認められなかった。水無瀬殿に関わるイメージを詠んだ和歌には, 1221年に後鳥羽上皇が隠岐に流されたのち, かつての後鳥羽上皇がいた水無瀬に思いを馳せる追慕の思いを詠んだものが認められる。九条基家は「河上に里あれ残る水無瀬山みし物とては月ぞすむらん」(新後拾遺和歌集)と, 水無瀬の山川や荒廃した里からかつてみた景色を想起しており, 水無瀬という場所に水無瀬殿や後鳥羽上皇への追慕のイメージが結びついていたことがわかる。4首は「水無瀬川」や「水無瀬山」を詠んでおり, 水無瀬の山川が叙景的に詠まれ

るようになって1世紀も経たずに, 追慕のイメージとも結びついていた。

また, 9世紀から詠み継がれてきた恋歌でも, 表現に多少の変化が認められた。12世紀の康資王母が「ふかからじみなせの河のむもれ木はしたのこひちに年ふりぬとも」(新勅撰和歌集)と詠んだように, 「深からじ」といった定型的な表現を残しつつも, 川の埋れ木などの景物を用いた比喻表現なども認められるようになった。源通親が別荘を営み, 13世紀には水無瀬殿が造営されたことで, 水無瀬と貴族らとの関わりが生まれ「水無瀬」や「水無瀬川」のイメージが具体化する中で, それまで普通名詞あるいは特定の表現を導くための枕詞としての使用が卓越していた恋歌にも影響を与えていたと考えられる。

4. おわりに

本研究では, 平安京南部の水辺の別業である河陽宮, 鳥羽殿, 水無瀬殿を対象に, 勅撰集から抽出した和歌・漢詩の整理によって, イメージの形成・変化の過程とその背景を明らかにした。

いずれの場所にも共通する特徴として, 次のことを示した。上皇らの盛衰やその追想などの, 別業や上皇らに結びついたイメージは, 別業の造営・衰退・途絶に伴って, 形成・変化・途絶していた。また, 別業や上皇らと直接は結びつかない, 周囲の自然に関わるイメージについても, 歌人らがその場所の自然に触れる機会が創出されたことで, 自然の捉え方の変化, 新たな歌枕の形成・定着, 既存のイメージの具体化などがみられた。

また, それぞれの別業におけるイメージの形成・変化の具体的な過程および水辺との関わり方について, 以下のことを明らかにした。

河陽宮では, 山川を中心とする大自然と別業とを区切らず, 一体として捉えていた。行幸が重ねられる中で, 辺境の大自然に身を置くことに対するイメージが, 畏怖や旅情といった未知の自然に対するイメージから, 俗世間を離れ悠然とした自然に触れる厭世的なイメージへと変化していたことを示した。

鳥羽殿では, 大きく, 鳥羽殿や上皇らに結びついたイメージと田園のイメージが認められた。鳥羽殿の象徴である池を景物とした栄華のイメージを主とする, 鳥羽殿や上皇らに結びついたイメージは, 鳥羽殿の盛衰に伴って形成・変化・途絶していた。その一方で, 田園のイメージは歌枕「鳥羽田」が定着したことで, 鳥羽殿の途絶後も詠み継がれていた。

水無瀬殿では, 9世紀以降普通名詞・枕詞として詠まれ恋のイメージと結びついていた「水無瀬川」が, 別業の地となるなかで, 固有名詞「水無瀬川」としてイメージ

が具体化した。また、13世紀のおよそ20年という短い間に別業の造営（整備）と衰退が起こったため、固有名詞「水無瀬川」「水無瀬山」はすぐに、かつての水無瀬殿を追慕するイメージとも結びついた。また、勅撰集の和歌には、水無瀬殿と水辺との直接的な関わりは詠んだものとは認められなかった。

以上のように、平安京南部の別業では、川や池を景物としてそれぞれの場所の主要なイメージが詠まれたが、イメージの形成・変化の過程や背景がそれぞれに異なっていたことで、水辺に多様なイメージが結びつけられていたことを示した。

参考文献

- 1) 山口敬太, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦: 近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究, 土木学会論文集D, Vol. 66, No. 1, pp. 14-26, 2010.
- 2) 吉村晶子, ヤニッキーアンドレア, 橋本健一, 中村良夫: 「おくのほそ道」における風景の動態的生成手法に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 60, No. 5, pp. 567-572, 1996.
- 3) 西嶋啓一郎, 仲間浩一: 朝鮮通信使による風景の記述に見られる風景生成と定着について, ランドスケープ研究, Vol. 63, No. 5, pp. 567-572, 1999.
- 4) 西田正憲: 瀬戸内海の発見 -意味の風景から視覚の風景へ-, 中公新書, 1999.
- 5) 山根ますみ, 篠原修, 堀繁: 武蔵野のイメージとその変化要因についての考察, 造園雑誌, Vol. 53, No. 5, pp. 215-220, 1989.
- 6) 山口敬太: 近世-近代の野と名所-嵯峨野の風景の生成と持続, 田路貴浩ら編: 日本風景史, 昭和堂, pp. 243-277, 2015.
- 7) 井実充史: 河陽文学の初発, 福島大学教育学部論集, No. 71, pp. 11-24, 2001.
- 8) 石井悠加: 鳥羽殿における詠歌史, 東京大学国文学論集13, pp. 65-81, 2018.
- 9) 木村尚志: 新古今時代の歌枕: 「水無瀬」をめぐって, 日本文学, Vol. 59, No. 12, pp. 12-21, 2010.
- 10) 国歌大観編集委員会 編: 新編国歌大観 全10巻, KADOKAWA, 1983-1992, ジャパンナレッジLibを参照
URL: <https://japanknowledge.com/library/index.html>
- 11) 塙保己一: 群書類従, 八木書店, 1983-2002, ジャパンナレッジLibを参照
URL: <https://japanknowledge.com/library/index.html>
- 12) 前掲7 河陽文学の初発
- 13) 小島憲之: 弘仁期文学より承和期文学へ-嵯峨天皇を中心とする応製奉和の詩賦をめぐって-, 国語文学, Vol. 34, No. 9, 1965.
- 14) 漢詩の書き下しや解釈には, 以下の文献を参考に用いた。
小島憲之: 日本古典文学大系06 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹, 岩波書店, 1955.
小島憲之: 国風暗黒時代の文学 中(中) -弘仁期の文学を中心として-, 塙書房, 1979.
小島憲之: 国風暗黒時代の文学 中(下) I -弘仁・天長期の文学を中心として-, 塙書房, 1985.
- 15) 前掲14 国風暗黒時代の文学 中(中) -弘仁期の文学を中心として-, pp. 1507
- 16) 前掲14 国風暗黒時代の文学 中(中) -弘仁期の文学を中心として-, pp. 1439
- 17) 前掲14 国風暗黒時代の文学 中(中) -弘仁期の文学を中心として-, pp. 1425
- 18) 于永梅: 平安時代の漢詩文における「猿声」「鹿鳴」の受容, 待兼山論叢 文学篇, No. 38, pp. 1-16, 2004.
- 19) 前掲14 日本古典文学大系06, pp. 201
- 20) 前掲14 日本古典文学大系06, pp. 277
- 21) 前掲14 日本古典文学大系06, pp. 196
- 22) 前掲14 日本古典文学大系06, pp. 284
- 23) 前掲14 国風暗黒時代の文学 中(下) I -弘仁・天長期の文学を中心として-, pp. 2210-2211
- 24) 前掲14 国風暗黒時代の文学 中(中) -弘仁期の文学を中心として-, pp. 1506
- 25) 前掲14 日本古典文学大系06, pp. 200
- 26) 前掲14 国風暗黒時代の文学 中(中) -弘仁期の文学を中心として-, pp. 1441
- 27) 前掲14 日本古典文学大系06, pp. 279
- 28) 経済雑誌社編: 扶桑略記, 国史大系 第6巻, 経済雑誌社, pp. 837, 1901.
- 29) 前掲8 鳥羽殿における詠歌史
- 30) 以下, 和歌の引用は 前掲10 新編国歌大観 から行う。
- 31) 犬養廉, 井上宗雄, 大久保正 他編: 和歌大辞典, 明治書院, pp. 741, 1986.
- 32) 前掲8 鳥羽殿における詠歌史
- 33) 三教書院編輯部 編: 増鏡 いてふ本, 三教書院, pp. 83, 1935.
- 34) 前掲33 増鏡, pp. 7
- 35) 前掲9 新古今時代の歌枕: 「水無瀬」をめぐって